ADVERTISEMENT 広告

“家族を育む器”として住まいを考えてほしい

建築家　横山 彰人（よこやま・あきと）氏
株式会社横山彰人建築設計事務所
代表取締役

住まいは家族一人ひとりのありようを映す鏡

現代の日本の住まいには、何が大切なのかという“本質”が失われてしまっているのではないか。建築家として、そんな疑問を強く感じるようになったのは、凶悪な少年犯罪事件が多発し、家庭内における引きこもりやコミュニケーション不足などの問題が表面化するようになった、1980年代以降のことでした。

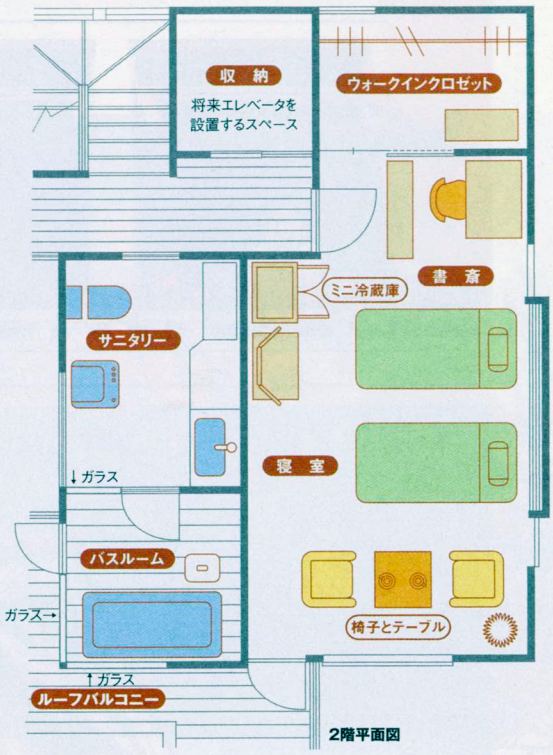
これまで私自身のいくつかの著書や講演などで主張してきたように、事件の陰にある家族問題は、実は住まいの問題と大きなかかわりをもっているように思えてなりません。ところが、家を「家族を育む器」ととらえる視点は、当時も今も見落とされがちです。家族問題そのものについて論じられる機会は多くあっても、住まいとのかかわりにおいては、残念ながら十分な検討がなされているとは言いがたいようです。

本来は家族の絆を強めるべき家で、なぜ子供が孤立し、家族が分断されるような事態が生じてしまうのか。私は、問題の根源は“部屋数主義”という旧態依然とした風習にあると考えています。空間としてのゆとりや広がりには目を向けず、収納面積を減らしてでも部屋数を確保しようとした住まいは、子供部屋の密室化という問題を引き起こし、結果的に少年犯罪の温床として機能する結果にもなりました。

マンションにしても同様です。玄関を開けると両サイドに個室があり、廊下の奥にリビングがある典型的な間取りパターンは、茶の間や縁側などのコミュニケーションスペースを介して家族の濃密なつながりを保てた昔の日本家屋とは、対極的な住まいの形と言えるでしょう。日本の住宅は戦後の時代を境に大きな変貌を遂げ、それまでの住文化と趣を一変させてしまいました。アメリカのモダンリビングに影響を受けた生活様式を取り入れ、縁側や床の間、勝手口、障子などの存在に象徴される、“遊びの空間”の豊かさを切り捨ててしまったと思うのです。

住まいについての考察は、単に「好き嫌い」や効率、性能のみのレベルで語られるべきではない、根源的な問題を含んでいます。アメリカで高校生を対象に行われたある実験では、「優秀で創造性もある学生」は「ガリ勉タイプの優等生」に比べ、屋根裏や地下室などの遊びの空間がある家での住体験をより多くもつとするデータが示されました。このように、住まいと人間形成は密接な相関関係にあることを、私たちはいま一度認識すべきではないでしょうか。

ADVERTISEMENT
広告



2階平面図

夫婦の寝室に書斎コーナーや、
話ができ、お茶も飲めるコーナーを設置。
ウオーキングクロゼットや
隣にトイレ、浴室もある夫婦を中心にした間取り

※文中の間取図、住宅写真は横山彰人氏の提供によるものです(以下同)。

間取りを考える際に充実させたい「夫婦の寝室」

家の新築や建て替えの相談に際して、よく聞かれるのが「子供のため」という動機付けです。初めは「書斎や家事室がほしい」「広いダイニングキッチンにしたい」「ホテルのようなパウダールームに」などの夢をもっていても、子供部屋のスペースを優先させることから、夢の実現をあきらめてしまう人が多いようです。

しかし、子供部屋が優遇され、そのことによって予算も削られていく中で、最も粗末にされてきたのは夫婦の寝室ではないでしょうか。欧米では一般に、大人の空間を基本とした住まいづくりがなされていますが、日本の場合は、まさに子供中心の家づくりが主流です。「きちんとした子供部屋を与えることが親の責任」というわけです。

しかし、改めて言うまでもなく、子供はいずれ成長して家を出ていくものです。せいぜい十数年しか使われない部屋のために、なぜ夫婦のプライベートスペースを犠牲にする必要があるでしょうか。そもそも寝室を「寝るだけの場所」ととらえるから、「寝られればいい」だけの場所になってしまうのです。

夫婦2人でコーヒーを飲んで寛いだり、ゆっくりお酒を飲みながら会話を交わしたり、あるいは手紙を書いたり、読書を楽しんだりできるしつらえになっていれば、寝室での過ごし方も変わってくるのではないでしょうか。

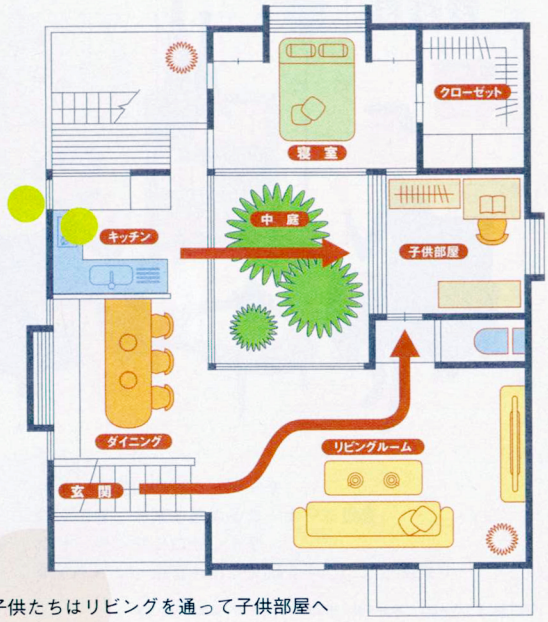
たとえ十分な広さが確保できない場合でも、夫婦の主寝室にちょっとした椅子とテーブルを置いたり、書斎コーナーを設けたりして、寝る以外のゆとりある時間の過ごし方ができるようにする。あるいは予算が許せば、ちょっとしたミニキッチンを備え付ける。そんな工夫ひとつで、夫婦の領域を充実させることは可能です。

また、最近は団塊の世代などで、家づくりの最初の段階から「別寝室」を望むご夫婦も増えていることが気にかかります。背景には、あまりにも子供中心の生活になってしまっていること、父親が仕事で家を顧みないことなどが原因で、夫婦の会話がきちんとされていない現状があるのかもしれません。また、女性の社会的地位の向上もあるでしょう。それにしても、夫婦が別々に寝る習慣は、一見プライバシーが保てて気楽なようですが、失うものも多いのです。

もし、別室を望むのであれば、互いの気配が感じられるような仕掛けを間取りに取り込みたいところです。たとえば、相手の部屋の明かりがつい

↑キッチンから子供部屋を見たところ
格子の窓が子供部屋

←玄関を入るとすぐに中庭がある。
中庭を挟んで、どこからでも
家族の気配を感じることができる



子供たちはリビングを通って子供部屋へ

ているのが見えるよう、中庭を介して互いの部屋を配置したり、間仕切りを使ってプライベートスペースに分けるなどの方法も考えられるでしょう。夫婦それぞれの小部屋と充実した寝室の両方が用意できれば、もちろんこれに越したことはありません。それなりの予算と広さを確保して両親のスペースを充実させることは、子供の成長にとっても、実は大変に重要なことなのです。

子供部屋の「個室神話」はもう過去のものとして改める

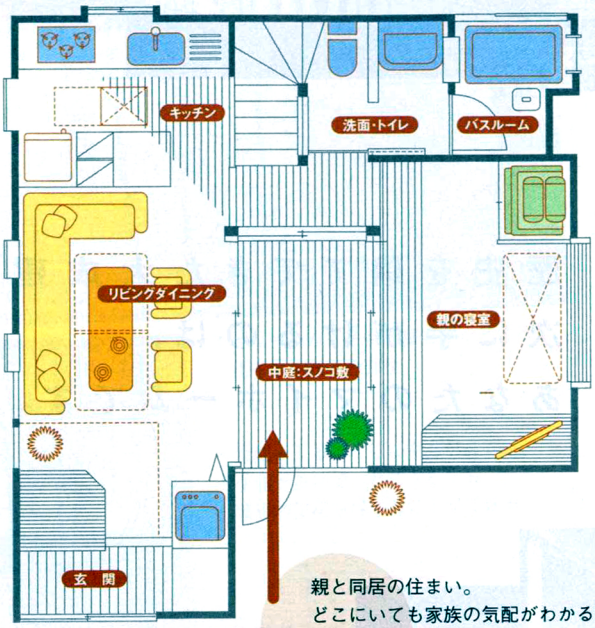
「気配が感じられる間取り」の重要性は、子供部屋においても同様です。子育ての環境は激変しており、子供は年々外で遊ばなくなり、同世代の友人をもちにくい状況が生まれています。家の中でも核家族化が進み、家庭の中で祖父や祖母の代と自然に触れ合う光景は、珍しいものとなりました。その結果、今の子供に欠けているとされているのが、社会性やコミュニケーション能力です。なぜなら、相手に対する思いやりや想像力、対人関係で必要とされる協調性などは、家庭内においては両親や兄弟、おじいちゃん、おばあちゃんを含め、さまざまな世代が集まる大家族の中でこそ醸成されるものだからです。

また、昭和50年代に入る頃から少年犯罪が急増しましたが、特に凶悪な事件を引き起こした少年たちの育った住環境には、いくつかの興味深い共通点が見られました。まず、玄関から親に顔を見られずに自分の子供部屋へ行け、外からも自由に出入りができる間取りであることや、子供部屋が親の寝室から離れた位置にあり、気配が全く感じられないことです。また、リビングルームが存在しないか、あっても家族団らんの場として機能していないケースが見受けられます。さらに近隣との付き合いが希薄なことでも、これらの家庭には奇妙な一致点が見られるのです。

もちろん個室の子供部屋には、こうしたマイナスの面ばかりがあるわけではありません。しかし、子供優先主義の「個室神話」は、改めるべきときにきていると言えるでしょう。

以前は受験勉強が子供に個室を与える動機となりがちでしたが、最近は入学試験の出題傾向もコミュニケーション能力を試す方向に変わりつつあります。つまり、個室では育たない社会性が、教育の成果として問われる時代になっているのです。

もうひとつ、子供部屋のあり方でよく見られるのが、小さな頃に部屋を与えたまま、大学生になるまで与えっぱなしにしているケースです。子供は



親と同居の住まい。
どこにいても家族の気配がわかる間取り。
中庭は道路から直接入ることができ、
近隣の人との社交の場ともなる。

絶えず成長する存在ですから、子供部屋も状況変化に応じて柔軟に変わるべきだというのが私の考えです。子供の精神年齢や自立の状況に配慮しながら、そのときどきで最適なリフォームを真剣に考えていくのが、本来のあり方ではないでしょうか。

「子供のため」と言いながら、実は親の尺度で選択してはいないか。安易に部屋を与えることで安心しきってはいないか。親も絶えず自分に問いかける厳しさをもちながら、自らの家庭で実現しようとする親子関係や家庭教育に最もふさわしい、理想の子供部屋を考えていく必要がありそうです。

男性にも求められる住空間への高い関心

住宅の設計にかかわっていると、しばしば家づくりにおける「父親不在」を実感させられる場面に出会います。会社での地位が高く、立派な仕事をしているにもかかわらず、わが家に対しては関心の薄い人が少なくないようです。

日本の家庭では、母親がすべてのことを背負いすぎる傾向が強いように思います。少なくとも家づくりの過程では、夫婦で意見を出し合い、徹底的に考える姿勢をもちたいところです。そうして関心を共有することにより、家族の絆も深まるものだからです。男性はとかく「家」というと、会社までのアクセスにかかわる立地や耐久性といった現実的な部分のみに関心をもち、住空間としての部分は軽視してしまいがちです。

以前、地方のある学校へ講演に行ったとき、校長先生が自身の家づくりについての失敗談を話してくれたことがありました。古くから住んでいた平屋建ての家を、同居する母親のために建て替えたときのエピソードです。新しい家では、家中で最も日当たりのよい2階東南の角部屋が、母親のために用意されました。その結果、どうなったか――確かに快適になったものの、お母さんはやがてリビングに来なくなってしまったというのです。

前の家では子供の出入りが多く、うるさいだろうから…と2階を譲った好意が仇となった格好で、「母にとっては孫のうるささも生きがいだったのに、楽しみをむざむざ取り上げてしまった」と後悔しておられました。

このように、家は家族の形に影響を及ぼすものです。高気密や日当たりなどはあくまでも要素にすぎず、絶対的条件ではありません。この校長先生の体験談は、男性が家づくりに際して犯しやす

家族団らんの場となるリビングルームを広くした間取の例

←以前は2人の子供が子供部屋を共有していたが、2段ベッドを中央に置いて小さくとも分離。子供の自立を促す工夫を図っている

←キッチンの壁を取り払い、視覚を広く。玄関を入ると1室空間のような開放的な間取り

←多目的に利用できるリビング・ダイニング。リビングの一角に勉強コーナーやパソコンコーナーを設け、家族の気配を感じながら、思い思いの時間を過すことができる

い誤りを改めて示唆してくれるとともに、「価値の高い住宅とは何か」「本当の意味でのバリアフリーとは何か」といった本質的な住宅観についても、再考するきっかけを与えてくれます。

私が以前に設計した家では、お医者さんである父親が「仕事が忙しいので、家にいるときはなるべく子供と一緒にいる時間を増やしたい」と言い、リビングルームに夫婦の机と子供2人の机をズラーッと並べた例もありました。これなどは、父親がしっかりと家族のありようを見つめ、家族の視点から住まいを構築した好例と言えるでしょう。

「ハードよりソフト」重視の住宅観をベースに間取りを工夫

日本の住宅の問題は、一言で言えば、ソフトの部分がないがしろにされてきた点にあります。高度成長時代に始まった豪華なLDK信仰などは、一見住み心地に関するキーワードのように見えて、実はハードの部分を表現しているにすぎません。家をソフトの観点からとらえるならば、重要なのは「どんな家を建てるか」よりも、「家とどう付き合っていくか」に目を向けるべきではないでしょうか。

子供がまだ小さいなら、「5歳になったとき」「10歳になったとき」「15歳になったとき」といったように5年ごとに変わっていくイメージを立て、その都度手をかけながら家を“つくっていく”。買い物はメンテナンスフリーのものがよい、とされる風潮がありますが、こと住宅に限っては、そうではないのです。

バリアフリーにしても、抜本的な加齢対応の家づくりがなされているケースは、まだまだ少ないのが現状です。定年退職をきっかけとして、老齢になったときの家づくりに踏み切るのも、ひとつの選択でしょう。日本人は健康に不安があると、とかく家を直すより自分の体を健康にしようと考えてしまいがちですが、必要なときに適切な手当てをしながら長く住む発想がほしいところです。間取りを検討する際、将来的にホームエレベーターを設置することを考慮に入れ、後からの取り付けが容易なように納戸としてスペースを確保しておくなど、フレキシブルなプランを取り入れるようにするとよいでしょう。

住まいのあり方を見直すことは、また今ある家族の形と直面することにもつながります。設計の相談に来られる方々に接していると、熟年のご夫婦は「リフォームする夫婦」と「リフォームしない(したがらない)夫婦」の2タイプに分かれることに気づきます。夫婦で建て替えやリフォームの是非や

プランについて論じているうち、自然と会話の時間が増え、それがきっかけで関係をリセットするご夫婦もいれば、埋められない価値観の溝に気がついて別居まで進んでしまうご夫婦もいます。

一般的な傾向として、建て替えやリフォームに積極的なのは奥さんのほうで、ご主人は現状維持でよしとする人が少なくありません。その言い分は、大抵が「まだ住める」というものですが、この発想こそがまさにハード的なのです。

質の高い住宅とは、無駄な空間も含めて、ソフトの部分がきちっと考慮された住まいのことです。そのためにも、節目ごとに家族像を点検し、その変化にふさわしい“器”として住まいを検証し、調整を試みる努力が必要です。特に共に過ごす時間が増える老後に向けて、住まいを積極的につくり直していく作業は、お互いの生き方を見つめ直す上でも有効なものとなり得るでしょう。（談）

Profile

建築家　横山 彰人（よこやま・あきと）氏
一級建築士
株式会社横山彰人建築設計事務所　代表取締役

1949年、山形県生まれ。米沢興譲館高等学校卒業。日本大学理工学部建築学科卒業後、（株）小崎嘉昭建築設計事務所を経て、79年に（株）横山彰人建築設計事務所を開設し、代表取締役に就任。個人住宅を中心に、家族のコミュニケーションを生かす家づくりを実践している。住まいに関する講演や執筆活動を行い、「子供をゆがませる『間取り』」（情報センター出版局）、「危ない間取り」（新潮社）、「夫婦をゆがめる『間取り』」（PHP研究所）、「建築家とならず望み通りの家が建つ」（山海堂）などの著書がある。
http://www.akito-y.com/

Present!
インターネットでの資料請求はこちらから
URL http://business.nikkeibp.co.jp/as/jutaku2007a/

資料請求いただいた方に抽選でプレゼント！

今回、資料請求をいただいた方の中から抽選で、横山彰人氏の著書『危ない間取り』（新潮社刊）を20名様に、アップル社製「iPod Shuffle」を3名様にプレゼントいたします。この企画内の綴じ込みハガキか、上記インターネットサイトからご請求ください。

■ハガキでのご請求
ハガキに必要事項をご記入の上、資料請求番号に○をつけた上期日までにご応募ください。（切手不要）
応募期間：2007年10月26日～12月20日（当日消印有効）

■Webでのご請求
上記URLにアクセスしていただき、資料請求用のバナーをクリック。必要事項にご記入の上、資料を請求したい企業をチェックしてご応募ください。
応募期間：2007年10月26日～12月25日

■プレゼントの種類はこちらで選ばせていただきます。

※当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※資料請求いただいた方については、日経BP社個人情報保護方針に基づき、弊社が登録情報をとりまとめ、該当広告主にお渡しいたします。それ以降は、各社それぞれの責任において管理され、資料のご案内等をさせていただきます。また、この情報を基に日経BP社および日経BPグループ会社からも、事務連絡のほか、各種ご案内（刊行物、展示会、セミナー等）やアンケートのお願いをさせていただく場合があります。予めご了承ください。
*日経BP社個人情報保護方針についてはこちら▶ http://www.nikkeibp.co.jp/information/privacy/

プレゼント

20名様

『危ない間取り』
横山 彰人氏著（新潮社）
家族から住まいを見る、という視点に立ち、家族空間を見直す画期的な住宅論。LDKは日本人に合わない…そんな住まいの新しい定説が明らかになる、目からウロコの住宅本！

3名様

「iPod Shuffle」
アップル社製
長さ約4cm、15.5gの小さなボディーに容量1GB。クールでおしゃれなデザイン。ポケットやバッグにクリップすれば、いつでもどこでも音楽を持ち歩ける。

■広告主一覧（五十音順）
エス・バイ・エル　スウェーデンハウス　セキスイハイム　大和ハウス工業　大成建設ハウジング　東京ガス　パナホーム